

人間万事塞翁が馬



PR TIMES社長 山口拓己

やまぐち たくみ

1996年4月、山一證券に入社した。配属先は福井支店。1つ上の先輩と、築数十年の寮で相部屋生活が始まった。日経平均が週に4日下がる中、株式投資を託していただくのが仕事だ。住宅地図を片手にエリア内全ての建物を訪問する。たとえ断られても、翌週もそのまた翌週も、同じく訪問する。福井は降水日数で毎年上位3県に入るほど、雨の日が多い。冬になると雨は雪になり、革靴が長靴になる。

営業成績の伸び悩みを雪のせいにしたくなる頃、同居する先輩がスノーボードに誘ってくれた。土日も寮にこもって見込み客向けに手紙を書き、息が詰まるような状態だった私を気遣ってくれたのだろう。ただ、初任給17万8千円、賞与は寸志だったので、お金がない。中古の板を譲り受け、普段着のウインドブレーカーを着て、ゲレンデへと向かった。



山一を去って東京で働き始めると、スノーボードからは遠ざかってしまった。だが28歳の冬に一念発起し、石打丸山のシーズンパスを購入して友人とリゾートマンションを借りた。当時の私はコンサルタントとして重要な

役割を任されるようになり、終電で帰宅する日々を過ごしていた。それでも毎週金曜、日付が変わる頃には関越トンネルを抜けて通ったのだ。趣味が高じて草大会にも出場し、インストラクターの資格まで取った。そして翌夏には、週末に屋内のハーフパイプ施設に通うほど没頭するようになっていた。

そんな時、左膝の前十字靭帯を断裂してしまふ。以前のように滑るには手術と半年以上のリハビリが必要と通告され、スノーボードは諦めた。期せずして、集中できるものが仕事だけになった。すると、それまでの自分が週末のために体力を温存しながら働いていたことに気付かされた。しかも実は、顧客の期待に達していないにも関わらず、自分では結果を出していると思いついて、現状を肯定するという厄介なループに陥っていたのだ。そんな私に、ほどほどで良いとしないこと、言い訳をしないこと、今、経営者として大切に行っていることを教えてくれたのは、顧客であり上司だった。

もしあの夏に大ケガを負っていなかったら、もし新入社員時代が順調だったら、今の自分はいないだろう。私がPR TIMESを立ち上げたのも、当時CFOを務めていた今の親会社業績不振になったことがキッカケだった。まさに、人間万事塞翁が馬。

今は無茶しなければ滑れるまでに回復し、年に1度はスノーボードを楽しんでいる。